

〈調査報告〉

中島力造と読書会 明治後期の西洋哲学受容の一断面

笠松 和也

近代日本のアカデミズムにおける西洋哲学受容は、1890年頃に一つの画期を迎える。それまで東京大学では西洋哲学の講義はもっぱらフェノロサからブッセへと至る外国人教師に任されていた。これに対して、1890（明治23）年にドイツ留学から帰国したばかりの井上哲次郎が、日本人として初の哲学教授に就任し、東洋哲学史を講じる傍ら、哲学概論を通してカントやショーペンハウアーの紹介を始めることになる。また、同年にはアメリカのジョンズ・ホプキンス大学でスタンレー・ホール（Stanley Hall, 1846-1924）から心理学を学んだ元良勇次郎が、心理学教授に就任し、フェヒナーの精神物理学やヴィルヘルム・ヴントの実験心理学、ウィリアム・ジェイムズの心理学に関する講義を始めている。1892（明治25）年には、アメリカのイエール大学でジョージ・トランブル・ラッド（George Trumbull Ladd, 1842-1921）に学んだ中島力造が、倫理学教授に就任し、イギリス功利主義やイギリス観念論（イギリス理想主義）の紹介を開始した。こうした新たな人事は、1893（明治26）年のケーベル招聘と合わせて、近代日本のアカデミズムにおける西洋哲学受容の水準を一気に押し上げたと考えられる。

しかし、このような変化に関する実際のありようをめぐっては、これまでもっぱら井上哲次郎らの著述を分析することから断片的にしか明らかにされてこなかった¹。そ

1 とりわけ後に触れるように、井上哲次郎「明治哲学界の回顧」（『岩波講座哲学 第11』岩波書店、1932年所収）が、近代日本哲学史研究におけるこの時期のイメージを形成する上で大きな影響力をもってきた。

ここで本稿では、明治後期の東大哲学科で行われていた研究会「読書会」に着目することを通して、より総合的に当時のアカデミズムにおける西洋哲学受容の傾向を考察するための手がかりを探ってみたい。

1. 読書会とそのメンバー

明治中期から後期にかけての東大哲学科では、教員や学生が中心となってさまざまな研究会が開かれていた。その一つが、1904（明治37）年に始まった「読書会」である。これは、倫理学教授であった中島力造が中心となって設立した研究会で、毎月1名または2名の報告者が最近欧米で刊行された研究書を1冊ずつ取り上げ、その概要を紹介して論評を行った上で、それについて全員が議論をするというものであった。規模は1906（明治39）年1月時点で約30名であり²、夏季休業中である8月を除けば、基本的に毎月第4土曜日午後2時に東京帝国大学集会所で開かれた³。

読書会での報告をもとにした『新著梗概』の執筆者を見ると、中島力造の急逝により読書会の活動が終わる1918（大正7）年までに、少なくとも以下の40名がメンバーになっていたことが分かる⁴。

青山惇揚、伊藤恵、今沢慈海、今福忍*、上野陽一、大島直治、大島正徳*、大村桂巖、尾田信忠、加藤玄智*、北沢定吉、紀平正美*、久保良英、桑田芳蔵*、笹倉新治、島本愛之助、松扉得悟、白井成允、新保徳寿、立柄教俊、田中治六、得能文*、十時弥、朝永三十郎*、豊田豊吉、中島徳蔵*、中島半次郎、中村安之助、林博太郎、速水滉*、深作安文*、藤井健治郎、法貴慶次郎、山口弘一、山崎直三、山邊知春、吉田静致*、吉田熊次*、淀野耀淳、渡辺隆勝（五十音順、*は以下で紹介する人物）

このうち代表的な人物をいくらか紹介しておきたい⁵。

-
- 2 「彙報 読書会」『哲学雑誌』第21巻第227号、83-84頁。
 - 3 その前週である第三土曜日には、元良勇次郎が中心となって「心理学会」を開催していた。Cf.「彙報 心理学会」『哲学雑誌』第21巻第227号、84-85頁。
 - 4 『修養講話』（1908年）から『今後の国民修養』（1915年）までの読書会臨時刊行書日の執筆者には、このほかに東京帝国大学文科大学で倫理学助教授を務めた友枝高彦、心理学者で真言宗智山派の僧でもある大槻快尊、能率研究で知られる心理学者の上野陽一らの名が見られる。
 - 5 東大卒業生のデータは、『東京帝国大学一覧附録（卒業生氏名）』をもとにした。『東京帝国大学一覧 従大正七年 至大正八年』巻末にも、同じ内容のデータが収録されている。

今福忍(1873-1923)は、大正期に活躍した論理学者である。神奈川県海老名市の名家、今福家に生まれ、1898(明治31)年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業している。専門は論理学で、早稲田大学や浄土宗大学で形式論理学を教え、それをもとに形式論理学の教科書である『最新論理学要義』(1908年)を刊行した。遅くともこの頃にはすでに読書会に参加している。1911(明治44)年度からは、東京帝国大学文科大学哲学科の講師として、同書を用いて形式論理学の講義をしたほか、ドイツにおける最新の論理学も紹介した。この講師は約15年間続けたが、1923(大正12)年9月1日に起こった関東大震災の際、大磯の別荘で被災し、家屋倒壊に巻き込まれて死亡した。

大島正徳(1880-1947)は、大正・昭和前期に活躍する哲学者・教育学者である。札幌農学校第一期生としてクラークの薫陶を受けたクリスチアンの大島正健を叔父にもつ。神奈川県高座郡海老名村(現・海老名市)に生まれ、1904(明治37)年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した後、1909(明治42)年まで大学院で英米哲学を研究していた。1911(明治44)年度から東洋大学で哲学概論と論理学を担当し、1912(大正元)年度からは東京帝国大学文科大学哲学科講師に着任した。少なくともこの頃には読書会に参加している。その後、1916(大正5)年に助教授に就任し、英米哲学の講義や哲学演習を担当した。講義ではイギリス経験論とプラグマティズムを紹介し、演習ではロック、バークリー、ヒューム、ベルクソン、ジェームズ、デュエイなどを講読した。1925(大正14)年4月には東京市学務局(のちの教育局)長に着任し、5月13日に教授に就任するものの、同日付で「依願免本官」の扱いで退官している。これ以降、1940(昭和15)年度まで、東大哲学科の講師として授業を担当することになる。その一方、1936(昭和11)年に第7回世界教育会議の事務総長に就任し、18カ月間に及ぶ準備活動を経て、1937(昭和12)年8月2日に東京帝国大学で第7回世界教育会議を開催している。その後、かねてより世界教育会議を通してフィリピンの教育関係者と交流があったことから、1942-1943(昭和17-18)年に比島調査委員会の委員となり、フィリピンの現地調査に協力する。戦後は1946(昭和21)年GHQ占領下で教育刷新委員会の委員となる。翌1947(昭和22)年に肝臓がんのため、東大病院で死去する。著書に『経験派の哲学』(1923年)、『近世英国哲学史』(1928年)、『現代哲学概観』(1931年)、『ヒューム人性論』(1935年)、『ロック』(1938年)、『現代アメリカ哲学』(1946年)等がある。

加藤玄智(1873-1965)は、大正・昭和期を代表する宗教学者・神道学者である。東京・渋谷に生まれ、1899(明治32)年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した後、1906(明治39)年度から同哲学科の宗教学講師を担当し、宗教学や神道を講じて

いる。この頃にはすでに読書会に参加しており、1918（大正7）年に中島力造が急逝する頃まで関わっていたようである。1921（大正10）年には助教授に就任し、新設された神道講座を担当することになった。1933（昭和8）年に退官してからは、國學院大學などで教鞭を執った。著書には、『宗教学上より見たる釈迦牟尼仏』（1910年）、『我が国体と神道』（1919年）、『神道の宗教学的な研究』（1922年）、『東西思想比較研究』（1924年）などがある。

紀平正美（1874-1949）は、大正・昭和前期に活躍した日本主義の哲学者である。三重県安濃郡（現・安芸郡）に生まれ、第四高等学校で講師の西田幾多郎からドイツ語を学んだ。1900（明治33）年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、その後大学院に進学している。のちに東大哲学科教授となる桑木厳翼^{げんよく}とは同年であるものの、桑木自身は1896（明治29）年7月に哲学科を卒業しているため、在学中はほとんど接点がなかったはずである⁶。専門はカントからヘーゲルまでの認識論で、特にヘーゲル論理学の研究に従事した。日本で初めてヘーゲルをドイツ語原文で読んだ世代に属し、まもなくヘーゲル研究の第一人者になる。1905-1906（明治38-39）年には『哲学雑誌』で同期の小田切良太郎とともに、ヘーゲル『小論理学』の一部（第1節～第126節の途中）をドイツ語原文から訳している。また、この頃にはすでに読書会に参加している。1911（明治44）年から東京帝国大学文科大学哲学科の講師となり、「認識論」や「範疇論」の講義を担当した。これが、草創期の岩波書店から刊行された『哲学叢書』シリーズの一冊である『認識論』（1915年）に結実する。これ以後、東京帝国大学での講師は23年間に及び、國學院や明治大学でも長く教えることになる。ところが、1919（大正8）年に学習院教授に着任し、独自の哲学体系を著した『行の哲学』（1923年）や『三願転入の論理』（1927年）を刊行した頃から、ヘーゲル弁証法と儒教・仏教の思想を折衷し、国民道徳論につなげるようになる。さらに、1932（昭和7）年に国民精神文化研究所の所員となり、日本主義の理論的指導者の一人になる。その成果が『なるほどの哲学』（1941年）や『なるほどの論理学』（1942年）として刊行される。ここでは、西洋における「ある」の論理と対置する仕方、東洋における「なる」の論理を展開することにより、西洋に対する東洋の優位を主張し、『古事記』を起点とした弁証法的歴史観としての皇国史観を樹立していくことが試みられている。1943（昭和18）年にはその集大成として『皇国史観』を刊行する一方で、同年国民精神文化研究所が教学錬成所に併合されると、所員を退職している。戦後は

6 読書会のメンバーの中に桑木厳翼の名が見られないが、これは桑木が1906（明治39）年に京都帝国大学文科大学教授に着任し、東京を離れていたという要因が大きいと考えられる。

公職追放となり、表舞台から姿を消し、1949（昭和24）年に76歳でひっそりと亡くなっている。

桑田芳蔵（1882-1967）は、大正・昭和期に活躍した心理学者で、日本における民族心理学研究の先駆者として知られる。鳥取県倉吉市生まれで、1905（明治38）年7月に東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修を卒業する。その後、助手を務める傍ら、読書会にも参加している。1910-1912（明治43-大正元）年にはドイツに留学し、ヴィルヘルム・ヴントから心理学を学ぶ。帰国後、1913（大正2）年に東京帝国大学文科大学講師として心理学を講じ、1917（大正6）年に心理学講座の助教授、1926（大正15）年に同教授に就任する。心理学講座では、民族心理学や社会心理学の講義をしたほか、心理学実験の授業も担当した。さらに、1941（昭和16）年からは、新設された東洋文化研究所の初代所長を兼務した。1943（昭和18）年に定年退官した後、大阪大学法文学部教授に就任し、1954（昭和29）年まで在職していた。著書に『靈魂信仰と祖先崇拜』（1916年）、『ヴントの民族心理学』（1918年）、『心理学』（1927年）があるほか、東京帝国大学での昭和12年度「心理学概論」の講義録が『心理学概論』全3冊（1936-1937年）として残っている。

得能文（1866-1945）は、大正期を代表する現代哲学の紹介者である。石川県専門学校（のちの第四高等中学校）在学中に西田幾多郎と学友になる。だが、同校が第四高等中学校に改組された頃に放校となり、1888（明治21）年7月に帝国大学文科大学哲学科の選科生として入学した（のちに同じく第四高等中学校を中退する西田も、得能の後を追って東大哲学科の選科生として入学することになる）。在学中は井上哲次郎や中島力造、ブッセに学んだ。ケーベル着任直前に金沢に転居したため、ケーベルの警咳に接することはなかった。1892（明治25）年7月に哲学科選科を修了した後、第四高等学校講師を経て、1908（明治41）年から哲学館（現・東洋大学）で教鞭を執るようになる。読書会にはこの頃から参加している。また、1915（大正4）年度から12年間、東京帝国大学で現代哲学の講義を担当している。講義で扱った範囲は広く、オイケン、ベルクソン、ディルタイに始まり、新カント派の西南学派（ヴィンデルバント、リッケルト、ラスク）、マールブルク学派（コーヘン、ナトルプ、カッシーラー）、ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、リップス、マイノング、ウィリアム・ジェイムズ、サンタヤーナ、新実在論、ラッセル、クローチェ、ニコライ・ハルトマンと多岐に及んだ。とりわけフッサール現象学の最初期の紹介者としての役割は重要である。講義では概ねそれぞれの著作の梗概を紹介した。こうした紹介の一端は、『最究竟者』（1927年）、『現今の哲学問題』（1928年）、『哲学講話』（1930年）、『真理の追求』（1935年）に見られる。なお、若い頃は正岡子規の門下であり、晩年の子規と書簡を

交わしている。

朝永三十郎(1871-1951)は、大正・昭和前期を代表する哲学史家で、とりわけ近世哲学史に関して重要な著作を残した。長崎県川棚町に生まれ、1898(明治31)年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。読書会に参加していたのはこの頃である。1907(明治40)年には京都帝国大学文科大学助教授(哲学哲学史)に着任し、1909-1913(明治42-大正2)年にヨーロッパ留学をする。帰国後、1914(大正3)年以降は、京都帝国大学文科大学に新設された哲学哲学史第四講座(西洋哲学史)の教授となる。この時期に刊行した『近世に於ける「我」の自覚史——新理想主義と其背景』(1916年)は、ルネサンスから新カント派に至るまでの自我概念の展開を追った力作で、当時広く読まれた。1931(昭和6)年に定年退官すると、大谷大学教授に就任し、その後1948(昭和23)年に学士院会員となった。ほかに著書として、『カントの平和論』(1922年)、『デカルト』(1925年)、『デカルト省察録』(1936年)などがある。息子はノーベル賞を受賞した物理学者、朝永振一郎である。

中島徳蔵(1864-1940)は、明治後期～昭和前期に活躍した倫理学者である。群馬県佐波郡赤堀村(現・伊勢崎市)に生まれ、1892(明治25)年に帝国大学文科大学哲学科の選科を修了した。1895(明治28)年に浄土宗高等学院教授に就任し、1897(明治30)年からは哲学館(のちの東洋大学)の講師となり、倫理学や倫理学史を講じた。ところが、1902(明治35)年12月に、文部省の視学官がミュアヘッドに関する中島の講義内容を問題視した口実に、文部省が哲学館に対して卒業生の教員検定試験免除の特典を取り消すことを通達する事態に発展した。いわゆる「哲学館事件」である。これにより、中島は哲学館講師を辞任せざるをえなくなる。この事件をめぐっては、翌1903(明治36)年に新聞・雑誌上で大論争が起こる。中島自身は、哲学館館主の井上円了の尽力により、1903(明治36)年9月に復職する。読書会には少なくとも1905-1909(明治38-42)年頃に関わっていたようである。1924(大正13)年には東洋大学学長事務取扱に就任するものの、東洋大学の大学昇格基金をめぐる内紛の影響で、東洋大学主催の釈尊祭で暴漢に襲われて重傷を負う。回復後、1926(大正15)年に東洋大学学長に就任する。それ以降、1931(昭和6)年6月に退任するまで、東洋大学の改革に尽力した。これにより、現在では東洋大学の「中興の祖」として知られている。著書には、『倫理学講義』(1899年)、『ヂュキーク氏倫理学』(1900年)、『実践倫理講話』(1910年)、『ヴェント倫理学綱要』(1921年)、『論語の組織的研究』(1941年)などがある。

速水滉^{ひろし}(1876-1943)は、大正・昭和前期に活躍した心理学者である。岡山市生まれで、1900(明治33)年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業する。深作安文、紀平正美、

吉田熊次らとは同期である。卒業後、山口高等学校教授を経て、1907（明治40）年から第一高等学校で「倫理、心理、論理」の講師を務め、1909（明治42）年には同教授に就任している⁷。これ以降、15年間にわたって、第一高等学校から東京帝国大学や京都帝国大学の哲学科に進学する生徒たちに大きな影響を与えた。読書会に参加していたのも、第一高等学校教授時代である。1924（大正13）年には同教授を退官し、京城帝国大学法文学部教授に就任する。欧米留学を経た後、心理学者の黒田亮とともに、京城帝大心理学研究室の基礎を築く。そして1936（昭和11）年には同大学総長に就任する。その後、1941（昭和16）年に退官する。著書には、『心理学』（1902年）、『現代の心理学』（1914年）、『論理学』（1916年）などがある。とりわけ岩波書店の『哲学叢書』シリーズの一冊であった『論理学』は、当時の学生に広く読まれた。

深作安文（1874-1962）は、明治後期～昭和前期に活躍した倫理学者である。茨城県に生まれ、1900（明治33）年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。在学中に井上哲次郎に師事し、水戸学を専門とするようになる。また、1904（明治37）年に始まった読書会には、その1年目から参加し、少なくとも1911（明治44）年まで関わっている。1908（明治41）年から東京帝国大学文科大学で倫理学の講師を務め、水戸学の道德思想や国体論、国民道德論を講じた。1912（大正元）年に同助教授、1926（大正15）年には同教授に就任し、倫理学第二講座の担当となった。1935（昭和10）年に定年退官し、東京商科大学（現・一橋大学）講師となる。昭和前期まで水戸学の第一人者として活躍し、国語・公民・修身科の学校教育にも影響を与えた。戦時期に刊行された著書には、日本の軍国主義を積極的に擁護する姿勢が見られる。著書は、『倫理と国民道德』（1916年）、『国民道德要義』（1916年）、『我国に於ける国体觀念の発達』（1920年）、『国民道德概説』（1929年）、『思想と国家』（1930年）、『日本道德要義』（1933年）、『日本倫理と日本精神』（1937年）、『今日に処するの道』（1937年）、『道の国日本』（1939年）、『水戸学要義』（1940年）、『興国の倫理』（1942年）など多数ある。

吉田静致（1872-1945）は、明治後期～昭和前期に活躍した倫理学者である。長野県に生まれ、1898（明治31）年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。1900（明治33）年に文部省在外研究員としてドイツに留学し、1902（明治35）年に帰国後、東京高等師範学校教授に就任する。1904（明治37）年に始まった読書会には、深作と同様、その1年目から参加し、少なくとも1916（大正5）年まで関わっていた。

7 第一高等学校の「倫理、心理、論理」のポストは、これ以前に桑木巖翼、松本文三郎が務めていたもので、速水の退任後は、大島正徳が担当していた「修身」のポストと統合され、「修身、心理」となり、心理学者・倫理学者の高橋穰^{ゆたか}が後を継ぐことになる。

1909（明治42）年度には1年間だけ、東京帝国大学文科大学講師として、西洋倫理学史を講じた。その後、1919（大正8）年に同大学倫理学講座（のちに倫理学第一講座）教授に就任した。それ以来、1933（昭和8）年に定年退官するまで、西洋倫理学史や現代の人生観を講じた。また、講義や演習では、ロシアの詩人・哲学者ウラジーミル・ソロヴィヨフ（Vladimir Solovyov, 1853-1900）を好んで取り上げていた。その点で、日本におけるソロヴィヨフの最初期の紹介者としても重要である。著書は、『倫理学講義』（1903年）、『西洋倫理学史講義』（1905年）、『倫理学基礎概念講話——人格の哲学』（1908年）、『倫理と人生』（1912年）、『国民道徳の新修養』（1914年）、『現代と道徳』（1915年）、『道徳の根本義——同円異中心主義』（1917年）、『道徳の原理』（1924年）、『人格の生活』（1924年）、『現代と精神生活』（1925年）、『ソロヴィヨフ道徳哲学』（1927年）など多数ある。自らの立場である「人格的唯心論」は、すでに『倫理学基礎概念講話』で強調されている。

吉田熊次（1874-1964）は、大正・昭和前期に活躍した教育学者である。山形県東置賜郡に生まれ、1900（明治33）年7月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。その後、大学院で教育学を学びながら、1901（明治34）年に小学校修身教科書起草員を務めた。1903（明治36）年にはドイツとフランスに留学し、翌1904（明治37）年に女子高等師範学校兼東京師範学校教授に就任する。1905（明治38）年に再びヨーロッパに留学し、帰国後の1907（明治40）年に東京帝国大学文科大学教育学講座分担の助教授に就任する。1916（大正5）年には教育学講座教授となり、それ以降1934（昭和9）年の定年退官まで、教育学を講じた。近代日本における教育学受容は、明治期にはヘルバルト学派の教育学が主流であったが、吉田はこれに対抗して社会的教育学を提唱した。また、ドイツの教育学者エルンスト・モイマン（Ernst Meumann, 1862-1915）の実験教育学を紹介したことでも知られる。読書会でもまさにモイマンの著書2冊を取り上げている。その一方、1932（昭和7）年に国民精神文化研究所の所員となり、その後同研究所の研究部長を務めている。そのため、現在では戦時期の日本主義に加担したと評価されている。著書は、『現今の教育及倫理問題』（1904年）、『社会的教育学講義』（1904年）、『社会的倫理学』（1904年）、『実験教育学の進歩』（1908年）、『系統的教育学』（1909年）、『教育的倫理学』（1910年）、『国民道徳と教育』（1911年）、『国民道徳とデモクラシー』（1919年）、『輓近教育問題の研究』（1919年）、『現今教育学説の根本思潮』（1921年）、『本邦教育史概説』（1922年）、『教育学原論』（1927年）、『陶冶と価値』（1929年）、『西洋教育史概説』（1930年）、『教育及び教育学の本質』（1931年）など多数ある。

このように、読書会のメンバーの大半は、1870-80年代生まれを中心とした東大哲学出身の比較的若い文学士たちである。当時の哲学科が哲学、倫理学、宗教学、心理学、社会学、教育学をはじめとするさまざまな分野を包摂する学科だったことにより、彼らの専門もまた多岐に及んでいた。そうした彼らが、大学やその他の教育機関で講師として活躍していた傍ら、読書会に参加して議論を交わしていたのである。

2. 読書会の刊行物

中島力造が主宰した読書会は、約14年間の活動の中で、大きく分けて2種類の刊行物を出版してきた。(A)読書会での報告をまとめた『新著梗概』シリーズと、(B)読書会メンバーによる特定テーマの論文集(読書会臨時刊行書目)である。以下、それぞれの概要を見ていきたい。

(A)『新著梗概』シリーズ

『新著梗概』シリーズは、読書会での報告を文章としてまとめた刊行物で、それぞれの報告者が欧米で刊行された最新の学術書についての概要と論評を寄せている(詳細な内容は、本稿末尾に付した資料「『新著梗概』シリーズ一覧」を参照)。下記のとおり、1905-1920(明治38-大正9)年にかけて目黒書店から全17冊が刊行された。

『新著梗概』第一輯 上巻 (1905年)

『新著梗概』第一輯 下巻 (1905年)

『新著梗概』第二輯 上巻 (1906年)

『新著梗概』第二輯 下巻 (1906年)

『新著梗概』第三輯 上巻 (1907年)

『新著梗概』第三輯 下巻 (1908年)

『新著梗概』第四輯 上巻 (1909年)

『新著梗概』第四輯 下巻 (1910年)

『新著梗概』第五輯 (1911年)

『新著梗概』第六輯 (1911年)

『新著梗概』第七輯 (1912年)

『新著梗概』第八輯 (1913年)

『新著梗概』第九輯 (1914年)

『新著梗概』第十輯 (1915年)

『新著梗概』第十一輯（1916年）

『新著梗概』第十二輯（1917年）

『新著梗概』第十三輯（1920年）

第一輯から第十二輯までは、1年に1冊または2冊のペースで刊行されていたが、第十三輯だけ刊行が遅れている。これは、中島力造が1918（大正7）年に急逝したためである。この第十三輯だけが中島の死後に刊行されている。

なお、『新著梗概』の正式な書名は、第一輯上巻～第二輯下巻が『倫理・心理・宗教・社会学・純正哲学 泰西新著梗概』、第三輯上巻～第七輯が『倫理・心理・宗教・教育・社会学・哲学 新著梗概』、第八輯以降が『倫理学・心理学・宗教学・教育学・社会学・哲学 新著梗概』である。

(B) 読書会臨時刊行書目

『新著梗概』シリーズとは別に、読書会のメンバーたちが、「読書会臨時刊行書目」として、特定のテーマで5冊の論文集を編んでいる。出版社は、『新著梗概』シリーズと同じく、すべて目黒書店である。

中島力造編『修養講話』（1908年）

中島力造編『修学実験談』（1910年）

中島力造編『泰西先哲像伝』（1912年）

中島力造編『外来思想と国民生活』（1914年）

中島力造編『今後の国民修養』（1915年）

『修養講話』は、「修養」に関して22名の著者がそれぞれの視点から自由に論じた論考を集めたものである。教育における論理学の必要性を論じた今福忍の論考から、ドイツ観念論の哲学者フィヒテを紹介する得能文や吉田熊次の論考まで、内容はさまざまである。

『修学実験談』は、22名の著者が自らの修学・学習体験を述べた論考を集めたものである。論文集というよりも随筆集に分類されるかもしれない。

『泰西先哲像伝』は、ピュタゴラスからフェヒナーまでの西洋哲学史を分担して解説したものである。この点で、他の4冊とは性格がやや異なっている。

『外来思想と国民生活』は、欧米の思想にどのような態度を取るべきかという問題意識の下、愛国心や婦人問題など、明治後期から盛んに論じられるようになったトピック

クを扱った論考を集めたものである。

『今後の国民修養』は、日露戦争後の国内の社会状況を踏まえた上で、青年の精神修養や民族的自覚などを論じた論考を集めたものである。

また、このほかに、中島力造の急逝後に、読書会編『中島教授在職二十五年記念論文集』（1919年）が刊行されている。これは、読書会のメンバー21名が各自の専門の論文を寄せたものである⁸。

3. 『新著梗概』シリーズの特徴

全17冊からなる『新著梗概』シリーズでは、計41名の評者による124本の記事が掲載され、それらの中で121冊の新著が紹介された⁹。以下では、このシリーズについて、本稿付録の資料を参考に、(1) 評者、(2) 原著者、(3) 原書の言語、(4) 原書の出版社、(5) 原書の刊行年という五つの視点から、その特徴を描き出してみたい。

(1) 評者

41名の評者のうち、3冊以上の新著を紹介した者を紹介冊数順に並び替えると、下記ようになる。

中島力造（36冊）、加藤玄智（6冊）、深作安文（6冊）、今福忍（5冊）、吉田静致（5冊）、尾田信忠（4冊）、紀平正美（4冊）、林博太郎（4冊）、立柄教俊（3冊）、

8 内容は以下のとおり。山口弘一「礼記と古俗」、笹倉新治「主親論」、田中治六「心物一如」、吉田熊次「権利思想の起源に関する臆説」、立柄教俊「国民性統一と民族同化」、加藤玄智「如是実在観」、菰田万一郎「倫理的判断の本質」、土屋幸正「倫理学上の動機論と結果論」、中島半次郎「教育に於ける人格的感化」、深作安文「日本倫理と儒教との関係」、紀平正美「カントに由て深化せられたる道徳的意識」、林博太郎「独逸に於ける立憲的公民教育論」、淀野耀淳「実践倫理に於ける孝道の意義を論ず」、今福忍「論理学的見地より見たる国語の研究」、吉田静致「同円異中心主義とデカルト、カント其他の哲学者」、島本愛之助「グリーン対シヂユウキツクを論じて倫理上の論理的意義に及ぶ」、友枝高彦「カントの倫理学に関する二三の批判的考察」、得能文「生起的方法と批判的方法」、大島正徳「考へると行ふと性格と」、大村桂巖「ザルツマンの訓育を論ず」、藤井健治郎「道徳と経済との関係についての諸方案」。

9 記事数と紹介された新著の数が合わないのは、同一の評者が2本の記事にわたって同一の新著を紹介した例が3箇所見られるからである。以下の分析では、同一の新著を紹介した場合は合わせて1例としてカウントした。

田中治六（3冊）、得能文（3冊）、中島半次郎（3冊）、淀野耀淳（3冊）

これを見ると、読書会を主宰していた中島力造の紹介冊数が飛び抜けて多いことが分かる。平均すれば、1年に約2冊のペースで、新著を紹介し続けていたことになる。このことから、中島自身が読書会の活動を支えていたことが推察できる¹⁰。次に紹介冊数が多いのは、6冊紹介した加藤玄智と深作安文である。両者とも東京帝国大学文科大学哲学科卒業後、同大学で講師を続け、そのまま同助教授に就任したため、学内で開かれていた読書会に特に参加しやすかったものと思われる。5冊を紹介した今福忍は、特に東京帝国大学文科大学の講師時代に積極的に参加していた。他方、同じく5冊を紹介した吉田静致は、のちに倫理学講座教授に就任するものの、読書会での活動はそれよりも前であるため、他の大学や教育機関で講師をしながら読書会に参加していた。

そのほかの評者も総合して考えると、確かに東京帝国大学文科大学の助教授や講師、助手等として在籍していた者が読書会に比較的参加しやすかったものの、他の大学や教育機関で講師をしていた者も積極的に読書会で活動していたと言える。

(2) 原著者

新著を紹介された原著者は107名に上る。そのうち、複数の新著が紹介されたのは、以下の12名である。

【3冊紹介】

ヒューゴー・ミュンスターバーグ (Hugo Münsterberg, 1863–1916)

ジョサイア・ロイス (Josiah Royce, 1855–1916)

【2冊紹介】

ブルーノ・バウフ (Bruno Bauch, 1877–1942)

エルンスト・モイマン (Ernst Meumann, 1862–1915)

ジョージ・ハーバート・パーマー (George Herbert Palmer, 1842–1933)

ゴールドワージー・ロウズ・ディキンソン (Goldsworthy Lowes Dickinson, 1862–1932)

ヘルマン・ハレル・ホーン (Herman Harrell Horne, 1874–1946)

10 ただし、『新著梗概』シリーズの「凡例」によれば、中島力造の記事に関しては、自筆した記事と、口頭発表を筆録させたものを校閲した記事が混在している。

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859–1952)

ポール・サミュエル・ラインシュ (Paul Samuel Reinsch, 1869–1923)

ルドルフ・オイケン (Rudolf Eucken, 1846–1926)

ウィリアム・ラルフ・ボイス・ギブソン (William Ralph Boyce Gibson, 1869–1935)

ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842–1910)

ヒューゴー・ミュンスターバーグは、当時アメリカで活躍していた心理学者である。ライプチヒ大学でヴィルヘルム・ヴントに師事して心理学を学んだ後、当初はフライブルク大学で実験心理学の研究に取り組んでいたが、ウィリアム・ジェイムズの招聘により渡米して、ハーバード大学に移って以降、応用心理学に舵を切ったことで知られる。読書会において、ヴントとジェイムズと合わせて、ミュンスターバーグの仕事が盛んに読まれていたことは特筆に値すると思われる。

ジョサイア・ロイスは、ウィリアム・ジェイムズと同時代のアメリカの哲学者で、「絶対観念論 (Absolute Idealism)」の立場を取ったことで知られる。現在ではあまり注目されないものの、当時のアメリカでは大きな影響力をもっていた。読書会でも、重要な著作である『不死性の概念 (The Conception of Immortality)』(1900年)や『忠誠の哲学 (The Philosophy of Loyalty)』(1908年)のほか、論文集『善悪の研究 (Studies of Good and Evil)』(1898年)が紹介されていたことは、注目に値する。しかも、『不死性の概念』は朝永三十郎、『忠誠の哲学』は中島力造、『善悪の研究』は紀平正美が紹介している。これは、当時の日本でロイスが広く読まれていたことを示す証拠の一つになりうる。

そのほか、新カント派の哲学者ブルーノ・バウフ、実験教育学を提唱した教育学者エルンスト・モイマン、新理想主義で知られる哲学者ルドルフ・オイケンなど、現在ではあまり読まれないものの、当時人気のあった思想家たちの著作が、読書会でも注目されていたことが分かる。

また、哲学・倫理学・心理学に関して、思想の潮流別に分類してみると、次のような原著者が取り上げられていたことが分かる。

【英米圏の観念論】

ジョサイア・ロイス (Josiah Royce, 1855–1916)

バーナード・ボーザンケット (Bernard Bosanquet, 1848–1923)

ハロルド・ヘンリー・ジョアキム (Harold Henry Joachim, 1868–1938)

ジョン・マクタガート (John McTaggart, 1866–1925)

【英米圏の倫理学】

ヘンリー・シジウィック (Henry Sidgwick, 1838–1900)

ジョン・ヘンリー・ミュアヘッド (John Henry Muirhead, 1855–1940)

【英米圏の論理学】

バーナード・ラッセル (Bertrand Russell, 1872–1970)

【プラグマティズム】

ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842–1910)

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859–1952)

【新カント派】

ヴィルヘルム・ヴィンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848–1915)

パウル・ナトルプ (Paul Natorp, 1854–1924)

ブルーノ・バウフ (Bruno Bauch, 1877–1942)

【新ヘーゲル主義】

ベネデット・クロッチェ (Benedetto Croce, 1866–1952)

【生の哲学】

ルドルフ・オイケン (Rudolf Eucken, 1846–1926)

【実験心理学】

ヴィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt, 1832–1920)

ジョージ・トランブル・ラッド (George Trumbull Ladd, 1842–1921)

テオデュール＝アルマント・リボー (Théodule-Armand Ribot, 1839–1916)

アルフレッド・ピネ (Alfred Binet, 1857–1911)

【宗教哲学】

エルンスト・トレルチ (Ernst Tröeltsch, 1865–1923)

【その他】

ヨハネス・フォルケルト (Johannes Volkelt, 1848–1930)

テオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851–1914)

現在の近代日本哲学史における通説では、明治後期には英米圏の哲学からドイツ哲学へと受容の重点が移ったとされるが、読書会においてはむしろドイツ哲学以上に、英米圏の観念論や倫理学、心理学が注目されていた。

(3) 原書の言語

読書会で紹介された全 121 冊の新著を言語別に集計すると、英語が 99 冊、ドイツ語が 19 冊、フランス語が 2 冊、日本語が 1 冊となり、英語で書かれた新著が 8 割を占めていたことが分かる。これには二つの理由があったと思われる。一つは、当時の文学士たちの語学力の問題である。明治中期から後期にかけての東大哲学科には、まだドイツ語が堪能な者が少なく、英語の新著の方が手に取りやすかった。もう一つは、書籍の輸入の問題である。当時、おそらく出版社の取次ぎの問題も関わり、ドイツやフランスよりも、アメリカやイギリスからの方が、書籍は輸入しやすかったようである。実際、中島力造がエルンスト・ヘッケル『永遠論』を紹介した記事には、ドイツ語の原書が入手できず、英訳を用いて紹介せざるをえなかったという証言が書かれている。

なお、ドイツ語の新著を紹介した評者は、北沢定吉、中村安之助、吉田静致、加藤玄智、大島直治、渡辺隆勝、林博太郎、吉田熊次、立柄教俊、淀野耀淳、中島半次郎、得能文、白井成允、山口弘一の 14 名である。また、フランス語の新著を紹介した評者は、上野陽一、山崎直三の 2 名であった。

(4) 原書の出版社

原書の出版社を言語別に見ると、英語の新著に関しては、全 99 冊中 37 冊がマクミラン出版社、6 冊がチャールズ・スクリブナーズ・サンズ出版社、6 冊がホートン・ミフリン出版社、4 冊がロングマンズ・グリーン出版社というように、やや偏りが見られる。これには、出版社の取次ぎの問題が関わっていた可能性がある。ドイツ語の新著に関しては、特定の出版社への偏りは見られないが、ライプチヒとハイデルベルクの出版社が目立つ。フランス語の新著は 2 冊とも、パリのフェリックス・アルカン出版社のものである。

(5) 原書の刊行年

原書の刊行年とそれを紹介した『新著梗概』の刊行年を比較すると、読書会では概ね刊行後 5 年以内の新著を扱っていたことが分かる。とりわけ刊行後 2-3 年以内に読書会で取り上げている例が非常に多い。当時、欧米からの書籍の取り寄せに時間がかかったことに加えて、『新著梗概』の内容は実際には前年の読書会の内容を反映するものだったことを考え合わせれば、これがいかにすさまじい早さであったかが推察できる。

4. 展望

現在の近代日本哲学史の枠組みでは、明治前期から中期にかけて、加藤弘之らがイギリスの進化論哲学を紹介したのに対して、明治後期には井上哲次郎らがカントやショーペンハウアーの紹介を始め、西洋哲学受容の中心もドイツ哲学へと移っていったと言われる。この見方は、井上哲次郎「明治哲学界の回顧」（1932年）や三枝博音『日本に於ける哲学的観念論の発達史』（1934年）にその源泉を求めることができる。だが、これらの著述が本当に正当な枠組みを示しているかは再考する必要がある。そもそも「明治哲学界の回顧」には、ドイツ留学から帰国し、東大哲学科にドイツ哲学を導入したという井上自身の自負が込められている。また、『日本に於ける哲学的観念論の発達史』は、最初から明治・大正期におけるカント・ヘーゲル受容の分析に視角が限定されており、明治後期の全般的な思潮を扱う性格の著作ではなかった。そのため、明治後期の西洋哲学受容がドイツ哲学偏重になったという見方は、決して当時の文献を渉猟した分析結果ではない。

また、明治中期から後期にかけては、しばしば「現象即実在論」という系譜が強調される。これは、井上哲次郎や井上円了らが唱えたとされる理論で、現象とその根拠となる真実在を同じものであるとする一元論であった。しかし、この系譜を強調する見方も、再考を迫られているように思われる。というのも、この系譜を最初に定式化した船山信一は、昭和唯物論の敵としての日本型観念論の源泉をたどる中で、明治中期から後期にかけての現象即実在論の系譜を見いだしているからである。現代において近代日本哲学史を描く上で、もはや単純には唯物論対観念論という図式を採用できない以上、現象即実在論の系譜を重視する見方も検証し直す必要がある。

本稿で紹介した読書会の事例は、まさにこうした近代日本哲学史の枠組みを再考するための一つの材料になりうる。というのも、読書会の活動は、ドイツ哲学偏重でもなければ、現象即実在論に動機づけられたものでもないからである。かといって、単なる西洋哲学受容にとどまるものではなく、読書会臨時刊行書目に見られるように、道徳や修養をめぐる明治後期の思潮と直結するものでもあった。明治後期の思想的状況を解明するには、今後このような事例の分析を積み重ね、その成果を横断的に活用することが求められるように思われる。

〔資料〕『新著梗概』シリーズ一覧

〈凡例〉

本資料「『新著梗概』シリーズ一覧」は、読書会の刊行物のうちの『新著梗概』シリーズ全17冊で取り上げられたすべての書籍の一覧である。『新著梗概』では、基本的に各書籍について、著者名と書名が和文・欧文併記された上で、刊行年が示されている。本資料を作成するにあたっては、その情報を手がかりに原書を特定した。同一書名・同一刊行年で複数の版がある場合には、東京大学図書館に所蔵されている当時の刊本の方である蓋然性が高いと判断し、そちらを採用した。また、原書の書誌情報については、Internet Archive や Google Books 等を活用して、できるだけ原書の画像を確認した。

第一輯 上巻（1905年）

ラッド氏著『行為哲学』（中島力造・解説）

George Trumbull Ladd, *Philosophy of Conduct: A Treatise of the Facts, Principles, and Ideals of Ethics*, New York: Charles Scribner's Sons, 1902.

グスタフ・ロイメリン氏著『政治と道徳法』（深作安文・解説）

Gustav Rümelin, *Politics and the Moral Law*, translated from the German by Rudolf Tombo, jr., edited with an introduction and notes by Frederick W. Holls, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1901.

セリグマン氏著『歴史之経済的説明』（立柄教俊・解説）

Edwin Robert Anderson Seligman, *The Economic Interpretation of History*, New York: Columbia University Press, 1902.

クーリー氏著『人性と社会組織』（山邊知春・解説）

Charles Horton Cooley, *Human Nature and the Social Order*, New York: Charles Scribner's Sons, 1902.

イリングワース氏著『理性と天啓』（加藤玄智・解説）

John Richardson Illingworth, *Reason and Revelation: An Essay in Christian Apology*, London: Macmillan & Co./New York: The Macmillan Co., 1902.

ヘンリー・シデュキック氏著『哲学の範囲及其関係』（朝永三十郎・解説）

Henry Sidgwick, *Philosophy, its Scope and Relations: An Introductory Course of Lectures*, London: Macmillan & Co./New York: The Macmillan Co., 1902.

第一輯 下巻（1905年）

アイロンズ氏著『倫理の心理学』（田中治六・解説）

David Irons, *A Study in the Psychology of Ethics*, Edinburgh: William Blackwood, 1903.

パーマー氏著『善の性質』（吉田静致・解説）

George Herbert Palmer, *The Nature of Goodness*, Boston/New York: Houghton Mifflin, 1903.

ヘンリー・スタート氏編『人格的唯心論』（中島力造・解説）

Henry Sturt (ed.), *Personal Idealism: Philosophical Essays*, London: Macmillan & Co./New York: The Macmillan Co., 1902.

ルトウールノー氏著『財産論』（藤井健治郎・解説）

Charles Letourneau, *Property: Its Origin and Development*, translated from *L'évolution de la propriété*, London: W. Scott/New York: Charles Scribner's Sons, 1892.

第二輯 上巻（1906年）

モルガン氏著『進化と道徳』（中島力造・解説）

Thomas Hunt Morgan, *Evolution and Adaptation*, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1903.

ストロング氏著『心身関係論』（中島力造・解説）

Charles Augustus Strong, *Why the Mind has a Body*, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1903.

デュプラー氏著『倫理学の心理学的及び社会学的基礎』（中島半次郎・解説）

Guillaume Léonce Duprat, *Morals: A Treatise on the Psycho-Sociological Bases of Ethics*, translated by W. J. Greenstreet, London: W. Scott, 1903.

アレキサンデル氏著『形而上学の問題及び形而上学的説明の意義』（紀平正美・解説）

Hartley Burr Alexander, *The Problem of Metaphysics and the Meaning of Metaphysical Explanation: An Essay in Definitions*, New York: The Macmillan Co., 1902.

ホーン氏著『教育哲学』（尾田信忠・解説）

Herman Harrell Horne, *The Philosophy of Education: Being the Foundations of Ed-*

ucation in the Related Natural and Mental Sciences, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1905.

第二輯 下巻 (1906年)

シルラー氏著『人性主義』(中島力造・解説)

Ferdinand Canning Scott Schiller, *Humanism: Philosophical Essays*, London: Macmillan & Co./New York: The Macmillan Co., 1903.

スタウト氏著『心理学原論』(中島徳蔵・解説)

George Frederick Stout, *The Groundwork of Psychology*, New York: Hinds & Noble, 1903.

カルマン氏著『帝国主義の倫理』(深作安文・解説)

Albert R. Carman, *The Ethics of Imperialism: An Enquiry whether Christian Ethics and Imperialism are Antagonistic*, Boston: Herbert B. Turner & Co., 1905.

ワルレーゼン氏著『自我の問題』(北沢定吉・解説)

Max Walleser, *Das Problem des Ich*, Heidelberg: Weiss, 1903.

ハクスレー氏著『進化論と倫理学』(新保徳寿・解説)

Thomas Henry Huxley, *Evolution and Ethics, and Other Essays*, London: Macmillan & Co., 1894.

第三輯 上巻 (1907年)

ブッシュ氏著『アエナリウス及び其単純経験』(中島力造・解説)

Wendell T. Bush, *Avenarius and the Standpoint of Pure Experience*, New York: Science Press, 1905.

ブルー氏著『倫理学と道徳学』(中島力造・解説)

Lucien Lévy-Bruhl, *Ethics and Moral Science*, London: Archibald Constable & Co., translated by Elizabeth Lee, 1905.

ジョアッキム氏著『真理の本質』(中島力造・解説)

Harold Henry Joachim, *The Nature of Truth: An Essay*, Oxford: Clarendon Press, 1906.

ジョシアー・ロイス氏著『永世の概念』(朝永三十郎・解説)

Josiah Royce, *The Conception of Immortality*, Boston/New York: Houghton, Mifflin & Co., 1900.

ゴールトン氏著『ユージェニックス』(得能文・解説)

Francis Galton, “Eugenics: Its Definition, Scope, and Aims”, *The American Journal of Sociology*, Vol. 10, No. 1, 1904.

ツエンケル氏著『社会倫理学』（中村安之助・解説）

Ernst Victor Zenker, *Soziale Ethik*, Leipzig: G. H. Wigand, 1905.

ビネー氏著『推理の心理学』（淀野耀淳・解説）

Alfred Binet, *The Psychology of Reasoning: Based on Experimental Researches in Hypnotism*, translated from the second French edition by Adam Gowans Whyte, Chicago: The Open Court Publishing Co., 1899.

ミュンテルベルヒ氏著『永劫の生命』（松扉得悟・解説）

Hugo Münsterberg, *The Eternal Life*, Boston/New York: Houghton, Mifflin & Co., 1905.

加藤弘之氏著『自然界の矛盾と進化』（豊田豊吉・解説）

加藤弘之『自然界の矛盾と進化』金港堂書籍、1906年。

第三輯 下巻（1908年）

アームストロング氏著『思想の過渡時代』（中島力造・解説）

Andrew Campbell Armstrong, *Transitional Eras in Thought, with Special Reference to the Present Age*, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1904.

ウイルリアム・ゼームス氏著『実用主義』（中島力造・解説）

William James, *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking: Popular Lectures on Philosophy*, London/New York: Longmans, Green & Co., 1907.

ボイス・ギブソン氏著『ルードルフ・オイケン氏人生哲学』（中島力造・解説）

William Ralph Boyce Gibson, *Rudolf Eucken's Philosophy of Life*, London: Adam and Charles Black, 1906, 1907 (2 ed.).

ブルース著『基督教道德の社会的方面』（中島力造・解説）

W. S. Bruce, *Social Aspects of Christian Morality*, London: Hodder and Stoughton/New York: E. P. Dutton, 1905.

ストエルリング氏著『倫理学の根本問題』（吉田静致・解説）

Gustav Störriing, *Ethische Grundfragen*, Leipzig: Wilhelm Englemann, 1906.

トレルチ氏著『二十世紀初に於ける宗教哲学の現況』（加藤玄智・解説）

Ernst Tröltzsch, “Religionsphilosophie”, in *Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts: Festschrift für Kuno Fischer*, 2 vols., Heidelberg: Carl Winter,

1904-05.

ジョシアー・ローイス氏著『自己意識社会意識及自然』（紀平正美・解説）

Josiah Royce, "Self-consciousness, Social Consciousness and Nature", in *Studies of Good and Evil: A Series of Essays upon Problems of Philosophy and of Life*, New York: D. Appleton and Co., 1898, 1906.

エンゼル氏著『心理学』（田中治六・解説）

James Rowland Angell, *Psychology: An Introductory Study of the Structure and Function of Human Consciousness*, New York: Henry Holt and Co., 1904, 1905 (3 ed., rev.).

ラムプレヒト氏著『歴史とは何ぞや』（立柄教俊・解説）

Karl Lamprecht, *What is History? Five Lectures on the Modern Science of History*, translated from the German by E.A. Andrews, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1905.

ウィルヘルム・ヴント氏著『心理学』（大島直治・解説）

Wilhelm Wundt, "Psychologie", in *Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts: Festschrift für Kuno Fischer*, 2 vols., Heidelberg: Carl Winter, 1904-05.

ブルーノー・バウフ氏著『倫理学』（渡辺隆勝・解説）

Bruno Bauch, "Ethik", in *Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts: Festschrift für Kuno Fischer*, 2 vols., Heidelberg: Carl Winter, 1904-05.

ミュンステルベルヒ氏著『永劫の生命』（松扉得悟・解説）

Hugo Münsterberg, *The Eternal Life*, Boston/New York: Houghton, Mifflin & Co., 1905.

第四輯 上巻（1909年）

デュウキー氏並タフツ氏共著『倫理学』（中島力造・解説）

John Dewey and James H. Tufts, *Ethics*, New York: Henry Holt and Co., 1908.

ロイス氏著『忠義哲学』（中島力造・解説）

Josiah Royce, *The Philosophy of Loyalty*, New York: The Macmillan Co., 1908.

ホーン氏著『教育の心理学的原則』（尾田信忠・解説）

Herman Harrell Horne, *The Psychological Principles of Education: A Study in the Science of Education*, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1906.

マッケンジー氏著『人本主義講話』（吉田静致・解説）

John Stuart Mackenzie, *Lectures on Humanism, with Special Reference to its Bearings on Sociology*, London: Swan Sonnenschein & Co./New York: Macmillan & Co., 1907.

パアシーナン氏著『科学的方法の目的と功果』（今福忍・解説）

Thomas Percy Nunn, *The Aim and Achievements of Scientific Method: An Epistemological Essay*, London: Macmillan & Co., 1907.

プラット氏著『宗教心理学』（加藤玄智・解説）

James Bissett Pratt, *The Psychology of Religious Belief*, New York: The Macmillan Co./London: Macmillan & Co., 1907.

ルドルフ・オイケン氏著『新入世観の綱領』（林博太郎・解説）

Rudolf Eucken, *Grundlinien einer neuen Lebensanschauung*, Leipzig: Veit & Comp., 1907.

モイマン氏著『実験教育学』（吉田熊次・解説）

Ernst Meumann, *Vorlesungen zur Einführung in die experimentelle Pädagogik und ihre psychologischen Grundlagen*, Leipzig: Wilhelm Englemann, 1907.

ジュリア・ウエッジウッド氏著『道徳的理想』（深作安文・解説）

Julia Wedgwood, *The Moral Ideal: A Historic Study*, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., 1907.

ジャッド氏著『心理学概論』（桑田芳蔵・解説）

Charles Hubbard Judd, *Psychology: General Introduction*, New York: Charles Scribner's Sons, 1907.

第四輯 下巻（1910年）

カボット氏著『日常倫理学』（吉田静致・解説）

Ella Lyman Cabot, *Everyday Ethics*, London: G. Bell, 1907 [c 1906].

ハドレー氏著『公德の標準』（中島徳蔵・解説）

Arthur Twining Hadley, *Standards of Public Morality*, New York/ London: Macmillan, 1907.

マクタガルト氏著『宗教の教義』（中島力造・解説）

John McTaggart Ellis McTaggart, *Some Dogmas of Religion*, London: Edward Arnold, 1906.

ノックス氏著『日本宗教の発達』（加藤玄智・解説）

George William Knox, *The Development of Religion in Japan*, New York/London: G. P. Putnam's Sons, 1907.

バルト氏著『教育学及教授学原理』（立柄教俊・解説）

Paul Barth, *Die Elemente der Erziehungs- und Unterrichtslehre, auf Grund der Psychologie der Gegenwart*, Leipzig: Johann Ambrosius Barth, 1906.

クラーク氏著『経済学の精髓』（中島力造・解説）

John Bates Clark, *Essentials of Economic Theory as Applied to Modern Problems of Industry and Public Policy*, New York: The Macmillan Co., 1907.

フオルケルト氏著『确实性の根源』（淀野耀淳・解説）

Johannes Volkelt, *Die Quellen der menschlichen Gewissheit*, München: C. H. Beck, 1906.

第五輯（1911年）

リード氏著『自然道徳と社会道徳』（中島力造・解説）

Carveth Read, *Natural and Social Morals*, London: Adam and Charles Black, 1909.

マクコンネル氏著『利他の義務』（中島力造・解説）

Ray Madding McConnell, *The Duty of Altruism*, New York: The Macmillan Co., 1910.

ラフィット氏著『実証的倫理学』（深作安文・解説）

Pierre Laffitte, *The Positive Science of Morals: Its Opportuneness, its Outlines, and its Chief Applications*, translated by J. Carey Hall, London: Watts & Co., 1908.

ディッキンソン氏著『善の意義』（大島正徳・解説）

Goldsworthy Lowes Dickinson, *The Meaning of Good: A Dialogue*, Glasgow: James Maclehose & Sons/New York: McClure, Phillips & Co., 1907 (4 ed.).

ミュンスターベルヒ氏著『心理学と犯罪』（速水滉・解説）

Hugo Münsterberg, *Psychology and Crime*, London: T. Fisher Unwin, 1909.

スマイス氏著『永生不滅の近代的信念』（田中治六・解説）

Newman Smyth, *Modern Belief in Immortality*, New York: Charles Scribner's Sons, 1910.

パームレー氏著『犯罪者に関する人類学及び社会学原理』（十時弥・解説）

Maurice Parmelee, *The Principles of Anthropology and Sociology in their Relations to Criminal Procedure*, New York: The Macmillan Co., 1908.

ラシュダル氏著『道徳哲学上の議論としての善悪論』（中島力造・解説）

Hastings Rashdall, *The Theory of Good and Evil: A Treatise on Moral Philosophy*,
Oxford: Clarendon Press, 1907.

第六輯（1911 年）

ベネット氏著『進化の倫理的方面』（中島力造・解説）

William Benett, *The Ethical Aspects of Evolution, regarded as the Parallel Growth of
Opposite Tendencies*, Oxford: Clarendon Press, 1908.

リボー氏著『感情の論理』（上野陽一・解説）

Théodule-Armand Ribot, *La logique des sentiments*, Paris: Félix Alcan, 1905.

ロス氏著『社会心理学』（今沢慈海・解説）

Edward Alsworth Ross, *Social Psychology: An Outline and Source Book*, New York:
The Macmillan Co., 1908.

ラインシュ氏著『世界政策』（法貴慶次郎・解説）

Paul Samuel Reinsch, *World Politics at the End of the Nineteenth Century, as Influ-
enced by the Oriental Situation*, New York: The Macmillan Co./London: Mac-
millan & Co., 1908 [c 1900].

ゼームス氏著『真理の意義』（紀平正美・解説）

William James, *The Meaning of Truth: A Sequel to 'Pragmatism'*, London/New
York: Longmans, Green & Co., 1909.

第七輯（1912 年）

ウルバン氏著『価値論（其の性質と法則）』（中島力造・解説）

Wilbur Marshall Urban, *Valuation, its Nature and Laws, being an Introduction to
the General Theory of Value*, London: Swan Sonnenschein & Co./New York:
The Macmillan Co., 1910 [c 1909].

モルトン・プリンス氏著『副意識現象』（久保良英・解説）

Hugo Münsterberg, Théodule-Armand Ribot, Pierre Janet, Joseph Jastrow, Ber-
nard Hart and Morton Prince, *Subconscious Phenomena*, Boston: Richard G.
Badger, 1911 [c 1910].

デイキンソン氏著『宗教（批評と予想）』（中島力造・解説）

Goldsworthy Lowes Dickinson, *Religion: A Criticism and a Forecast*, New York:
McClure, Phillips & Co., 1906 [c 1905].

ギブソン氏著『神人同契』（今福忍・解説）

William Ralph Boyce Gibson, *God with us: A Study in Religious Idealism*, London: Adam and Charles Black, 1909.

デュウエー氏著『教育の基礎としての倫理学的原理』（中島力造・解説）

John Dewey, *Ethical Principles underlying Education*, Chicago: University of Chicago Press, 1905 [c 1903].

バルフォア氏著『衰頹論』（中島力造・解説）

Arthur James Balfour, *Decadence: Henry Sidgwick Memorial Lecture*, Cambridge: Cambridge University Press, 1908.

ウィンドルバンド氏著『十九世紀の独逸思想界に於ける哲学』（淀野耀淳・解説）

Wilhelm Windelband, *Die Philosophie im deutschen Geistesleben des XIX. Jahrhunderts: Fünf Vorlesungen*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1909.

第八輯（1913年）

ケーラス氏著『人格論』（中村安之助・解説）

Paul Carus, *Personality, with Special Reference to Superpersonalities and the Interpersonal Character of Ideas*, Chicago: The Open Court Publishing Co., 1911.

デアスラン氏著『道徳に於ける経験と思考力』（山崎直三・解説）

G. Aslan, *L'expérience et l'invention en morale*, Paris: Félix Alcan, 1910 [c 1908].

ピルスビューリー氏著『推理の心理』（今福忍・解説）

Walter Bowers Pillsbury, *The Psychology of Reasoning*, New York: D. Appleton and Co., 1910.

オイケン氏著『宗教と人生』（中島力造・解説）

Rudolf Eucken, *Religion and Life*, London: British and Foreign Unitarian Association, 1911.

フェルステル氏著『青年徳育論』（林博太郎・解説）

Friedrich Wilhelm Foerster, *Jugendlehre: ein Buch für Eltern, Lehrer und Geistliche*, Berlin: Georg Reimer, 1910 (3 ed.)

ラッセル氏著『哲学論集』（中島力造・解説）

Bertrand Russell, *Philosophical Essays*, London/New York: Longmans, Green & Co., 1910.

第九輯（1914年）

スピュレル氏著『愛国心の生物学的研究』（中島力造・解説）

Herbert George Flaxman Spurrell, *Patriotism: A Biological Study*, London: G. Bell and Sons, 1911.

ハクルイト・エガートン氏著『愛国』（深作安文・解説）

Hakluyt Egerton, *Patriotism: An Essay towards a Constructive Theory of Politics*, London: George Allen, 1905.

モイマン氏著『知能と意志』（吉田熊次・解説）

Ernst Meumann, *Intelligenz und Wille*, Leipzig: Quelle & Meyer, 1908.

ドレウス氏著『救主神話』（加藤玄智・解説）

Arthur Drews, *The Christ Myth*, translated from the third edition (revised and enlarged) by C. Delisle Burns, London/Leipzig: T. Fisher Unwin, [pref. 1910].

シイソン氏著『性格の要素』（尾田信忠・解説）

Edward O. Sisson, *The Essentials of Character: A Practical Study of the Aim of Moral Education*, New York: The Macmillan Co., 1910.

アルフレッド・ハン氏著『勤労学校の理論と実際』（中島半次郎・解説）

Die Arbeitsschule: Beiträge aus Theorie und Praxis : Arbeiten aus der methodischen Abteilung des Leipziger Lehrervereins, Leipzig: Alfred Hahns, 1910.

ピィポデイ氏著『社会問題入門』（中島力造・解説）

Francis Greenwood Peabody, *The Approach to the Social Question: An Introduction to the Study of Social Ethics*, New York: The Macmillan Co., 1909.

ラインシ氏著『極東に於ける思潮及び政変』（法貴慶次郎・解説）

Paul Samuel Reinsch, *Intellectual and Political Currents in the Far East*, Boston/New York: Houghton Mifflin, 1911.

第十輯（1915年）

ボサンケー氏著『個態及び価値の原理』（吉田静致・解説）

Bernard Bosanquet, *The Principle of Individuality and Value: The Gifford Lectures for 1911 delivered in Edinburgh University*, London: Macmillan & Co., 1912.

マクデュガル氏著『身体と精神』（中島力造・解説）

William McDougall, *Body and Mind: A History and a Defence of Animism*, New York: The Macmillan Co., 1911.

ウェザム氏著『社会と遺伝』（速水滉・解説）

William Cecil Dampier Whetham and Catherine Durning Whetham, *Heredity and Society*, London/New York: Longmans, Green & Co., 1912.

ブルークス・アダムス氏『社会革新の理』（青山惇揚・解説）

Brooks Adams, *The Theory of Social Revolutions*, New York: The Macmillan Co., 1913.

リップス氏著『哲学と現実』（得能文・解説）

Theodor Lipps, *Philosophie und Wirklichkeit*, Heidelberg: Carl Winter, 1908.

ホルト氏等合著『新実有論』（中島力造・解説）

Edwin Bissell Holt et al., *The New Realism: Coöperative Studies in Philosophy*, New York: The Macmillan Co., 1912.

第十一輯（1916年）

バットラー氏著『国際的精神』（深作安文・解説）

Nicholas Murray Butler, *The International Mind: An Argument for the Judicial Settlement of International Disputes*, New York: Charles Scribner's Sons, 1912.

セイ氏著『ベルグソン哲学の倫理的 content』（島本愛之助・解説）

Una Bernard Sait, *The Ethical Implications of Bergson's Philosophy*, New York: Science Press, 1914.

ラズルスキー氏著『個性の研究に就て』（林博太郎・解説）

A. Lasurski, *Über das Studium der Individualität*, Deutsch von N. Gadd, Leipzig: O. Nemnich, 1912.

ギッフアト氏著『近世宗教観念の起源』（中島力造・解説）

Arthur Cushman McGiffert, *The Rise of Modern Religious Ideas*, New York: The Macmillan Co., 1915.

ケルラー氏著『社会の進化』（中島力造・解説）

Albert Galloway Keller, *Societal Evolution: A Study of the Evolutionary Basis of the Science of Society*, New York: The Macmillan Co., 1915.

バアカー氏著『歴史的知識の哲学』（今福忍・解説）

DeWitt Henry Parker, *The Metaphysics of Historical Knowledge*, Berkeley: University of California Press, 1913.

リンドセイ氏著『純正哲学の根本問題』（笹倉新治・解説）

James Lindsay, *The Fundamental Problems of Metaphysics*, Edinburgh/London: William Blackwood & Sons, 1910.

合著『哲学的諸科学集成第一巻論理学』（紀平正美・解説）

Arnold Ruge, Wilhelm Windelband, Josiah Royce, Louis Couturat, Benedetto

Croce, Federigo Enriques and Nicolaj Losskij, *Encyclopaedia of the Philosophical Sciences, Volume I: Logic*, translated by B. Ethel Meyer, London: Macmillan & Co., 1913.

第十二輯（1917 年）

バウフ氏著『批判的倫理学に於ける幸福及人格』（白井成允・解説）

Bruno Bauch, *Glückseligkeit und Persönlichkeit in der kritischen Ethik*, Stuttgart: Fr. Frommann, 1902.

ワトサン氏著『行動（比較心理学入門）』（桑田芳蔵・解説）

John Broadus Watson, *Behavior: An Introduction to Comparative Psychology*, New York: Henry Holt, 1914.

ナトルプ氏著『国民的文化と人格的文化』（林博太郎・解説）

Paul Natorp, *Volkskultur und Persönlichkeitskultur: sechs Vorträge*, Leipzig: Quelle & Meyer, 1911.

デューイ氏著『民本主義と教育（教育哲学序論）』（中島半次郎・解説）

John Dewey, *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, New York: The Macmillan Co., 1916.

クローツェ氏著『ヘーゲル哲学論』（中島力造・解説）

Benedetto Croce, *What is Living and What is Dead of the Philosophy of Hegel*, translated from the original text of the third Italian edition, 1912 by Douglas Ainslie, London: Macmillan & Co., 1915.

ドリーシュ氏著『個人性問題』（中島力造・解説）

Hans Driesch, *The Problem of Individuality: A Course of Four Lectures Delivered before the University of London in October 1913*, London: Macmillan & Co., 1914.

ボサンケット氏著『個体の価値及遇命』（吉田静致・解説）

Bernard Bosanquet, *The Principle of Individuality and Value: the Gifford Lectures for 1911 delivered in Edinburgh University*, London: Macmillan & Co., 1912.

カストロー氏著『心理学・論理学相互の立脚地論』（今福忍・解説）

Matilde Castro, *The Respective Standpoints of Psychology and Logic*, Chicago: University of Chicago Press, 1913.

合著『哲学的諸科学集成第一巻論理学』（続編）（紀平正美・解説）

Arnold Ruge, Wilhelm Windelband, Josiah Royce, Louis Couturat, Benedetto

Croce, Federigo Enriques and Nicolaj Losskij, *Encyclopaedia of the Philosophical Sciences, Volume I: Logic*, translated by B. Ethel Meyer, London: Macmillan & Co., 1913.

第十三輯（1920年）

パーマー氏著『倫理学分野論』（伊藤恵・解説）

George Herbert Palmer, *The Field of Ethics: Being the William Belden Noble Lectures for 1899*, Boston/New York: Houghton Mifflin, 1901.

シャンド氏著『性格の基礎』（尾田信忠・解説）

Alexander Faulkner Shand, *The Foundations of Character: Being a Study of the Tendencies of the Emotions and Sentiments*, London: Macmillan & Co., 1914.

シュレーブス氏著『教育の哲学的基礎』（大村桂巖・解説）

Rolland Merritt Shreves, *The Philosophical Basis of Education*, Boston: Richard G. Badger, 1918.

ヴァリスコ氏著『汝自らを知れ』（得能文・解説）

Bernardino Varisco, *Know Thyself*, translated by Guglielmo Salvadori, London: George Allen and Unwin, 1915.

ヘツケル氏著『永遠論』（中島力造・解説）

Ernst Haeckel, *Eternity: World-War Thoughts on Life and Death, Religion, and the Theory of Evolution*, translated by Thomas Seltzer, New York: Truth Seeker, 1916.

レーバ氏著『神及び靈魂不滅の信仰』（加藤玄智・解説）

James Henry Leuba, *The Belief in God and Immortality: A Psychological, Anthropological and Statistical Study*, London: The Open Court Co., 1916.

『国際的危機（国家論）』（中島力造・解説）

Louise Creighton, William Ritchie Sorley, John Stuart Mackenzie, Alexander Dunlop Lindsay, Hastings Rashdall and Hilda Diana Oakeley, *The International Crisis: The Theory of the State: Lectures delivered in February and March 1916*, with an opening address by Viscount Bryce, London/New York [etc.]: Humphrey Milford, Oxford University Press, 1916.

ミュアヘッド氏著『国家の職責（グリーンの世界論）』（島本愛之助・解説）

John Henry Muirhead, *The Service of the State: Four Lectures on the Political Teaching of T. H. Green*, London: John Murray, 1908.

シュツキング氏著『国家発展の新目的』（山口弘一・解説）

Walther Schücking, *Neue Ziele der staatlichen Entwicklung: eine politische Studie*,
Marburg: N. G. Elwert, 1913.